

論理力と思考力

野矢茂樹のやしげき

要旨 「論理力」とは、「思考力」とは違う。思考の結果を、一貫した、飛躍の少ない、理解しやすい形で表現するときにはたらく力である。さらに、表現されたものを的確に読み取り、理解することも論理の力である。それゆえ、論理力とは、考えをきちんと伝える力であり、伝えられた物を受け取る力にほかならない。つまり、論理力とは言語的能力の一つであり、「読み書き」の力、言葉と言葉の関係の仕方を捉える力なのである。

◎第一段〔論理〕と〔思考〕

「論理」とは何だろうか。

ひと言でいえば、「論理」とは、言葉が相互にもつている関連性にほかならない。しかし、そのことの説明を続ける前に、まずは論理に対する一つの一般的な誤解を解いておこう。

一般に、論理力というのはすなわち思考力だと思われるのではないだろうか。「論理的思考力」とか「ロジカル・シンキング」といった言葉がよく聞かれるように、論理とは思考に関わる力だと思われがちである。だが、そこには誤解がある。論理的な作業が思考をうまく進めるのに役立つというのは確かだが、論理力は思考力そのものではない。

思考は、結局のところ最後は「閃き」(飛躍)に行き着く。そのために、グループで自由にアイデアを出し合う、いわゆるブレイン・ストーミングなどを行ったりもする。そしてブレイン・ストーミングなどでは、論理的に一貫した発言をすることよりも、可能な限

●参照

現代社会を読み解くために3↓404ページ

5

1ブレイン・ストーミング (brainstorming) (英語) 自由討論方式で多くの意見を出し合い、独創的なアイデアを引き出す集団思考法。

10

論理的に一貫した解説・説明を旨とする「論理力」との二項対立の構図を明瞭にする。

り自由に発想していくことの方が有効なものとなる。思考の本質はむしろ飛躍と自由であり、そしてそれは論理の役目ではない。

論理は、むしろ閃きを得た後に必要となる。閃きによって得た結論を、誰にでも納得できるように、そしてもはや閃きを必要としないような、できる限り飛躍のない形で、再構成しなければならない。なぜそのような結論に到達したのか。それをまだその結論に到達していない人に向かって説明しなければならないのである。

5 思考の本質は「閃き」(自由)にあるのに対して、論理の本質は、「説明」(規範)にあるとする。

ここで重要なのは、あなたがその結論に到達した実際の筋道ではない。実際の思考の筋道は、すでに述べたように、最終的な閃きに至った紆余曲折のある道だろう。苦労話をするといいのでもない限り、それをそのままアピールしても意味はない。どういう前提から、どういう理由で、どのような結論が導けるのか。そしてそれ以外の結論はどうして導け

10

うにないのか。そうしたことを論理的に再構成して説明するのである。

たとえば、数学の証明などはもつとも厳格な論理を展開するものといえるが、数学者が実際に数学の証明のとおり筋道で考えたなどということはありえない。さまざまな飛躍を含みつつなされた思考を、飛躍を許さない形で新たに書き直したものを、それが証明にほかならない。

これまで展開してきた「思考」と「論理」の関係についての論点を反復・整理して確認する。繰り返そう。思考の筋道をそのまま表すのではない。思考の結果を、できる限り一貫し

* 語句

紆余曲折

15

論理についての事例

た、飛躍の少ない、理解しやすい形で表現する。そこに、論理がはたらく。

◎第二段(言語的能力としての論理力)

さらに、そのように表現されたものをきちんと読み解かねばならない。その結論はどのような根拠から導かれているのか。その根拠は結論を導くのに十分強いものであるのか。あるいは、議論全体の方向や筋道はどうなっているのか。そうしたことを的確に読み取り、理解し、また評価する。それもまた、論理である。

↓論理についての説明を踏まえた論理力の指定

それゆえ、論理力とは、思考力のような新しい物を生み出す力ではなく、考えをきちんと伝える力であり、伝えられた物をきちんと受け取る力にほかならない。つまり、論理力とはコミュニケーションのための技術、それゆえ言語的能力の一つであり、「読み書き」の力なのである。

↓前段を受け、他の用語や具体的な場面を用いて詳細な説明を行っている。

より詳しくいえば、論理力とは、さまざまな言語的能力の中でも、とりわけ言葉と言葉の関係——ある言葉と他の言葉がどういう仕方につながりあっているのか——を捉える力である。典型的には、根拠と結論をつないでいく力、すなわち論証を読み解き、自ら組み立てる力であるが、それだけではない。人の話を聞いて、さっきの話と今の話はどう関係するのか、それを把握する力も、論理力である。そしてまた、論文や報告書、あるいは一冊の本全体の中で、その部分はどのような位置づけを与えられているのか、そうした全体と部分の関係を捉えるのも、論理の力にほかならない。

識字能力(リテラシー)。「読む」とは文字に書かれた言語の一字一字を正しく発音して理解(読解)することを指し、「書く」とは文字を言語に合わせて正しく記することを指す。

◎第三段(「非論理的」とは何か)

逆に、「論理的ではない」とは、個々の主張をそれだけ取り出して考え、それらの主張の間の関係を捉えようとしめない態度である。すなわち、言葉を断片的にしか捉えられず、主張相互の関係を捉えることができないとき、その人は「非論理的」と言われてしまうことになる。

(出典『新版論理トレーニング』二〇〇六年)

産業図書

冒頭部で「論理」とは、「言葉が相互にもっている関連性にはかならない」(14・2)とある。また、「論理力」とは「言葉と言葉の関係——ある言葉と他の言葉がどういう仕方につながりあっているのか——を捉える力である」(16・10)とある。その上で最終段落では、「非論理」をいうことで、「論理」についての論旨を完結する。ここで「論理」とは、言葉相互の関係を捉えることであるという筆者の主張を再確認し、冒頭からの振り返りを行う。



(本人提供)

野矢茂樹 一九五四（昭和二九）年。哲学者。東京都の生まれ。哲学的思索をもとに、言語や認識についての論考を発表している。著書に『論理学』『論理トレーニング』『訳書にL・ワイトゲンシュタイン『論理哲学論考』などがある。

「論理力」とは、「閃き」（飛躍）によって自由に発想していく「思考力」とは違い、思考の結果を誰にでも納得できるように説明する表現力であり、表現されたものを的確に読み取って理解する力である。

課題 A

「論理力とは、思考力のような新しい物を生み出す力ではなく、考えをきちんと伝える力であり、伝えられた物をきちんと受け取る力にほかならない。」（16・6）とはどういうことか、筆者の考えを整理してみよう。

課題 B

次の課題に取り組んでみよう。

（1）次の①②の推論は正しいか正しくないか、根拠と結論のつなぎ方に着目して、判定してみよう。

- ①彼は愛想が悪い。だから、営業に向かない。
②自己管理ができていない人は風邪を引く。逆にいえば、風邪を引くやつは自己管理ができていない。

①②とも、正しくない（正しい推論とはいえない）。

①は、「しかし」のあとに続ける言葉「ミスもする」を強調したい表現である。それに比して、②は「ただし」の前にある「仕事が早い」のほうを強調したい表現になっている。

（2）次の①②の伝わり方の違いを説明してみよう。

- ① Aさんは仕事が早い。しかし、ミスもする。
② Aさんは仕事が早い。ただし、ミスもする。

（『ロンリのちから』二〇一五年による）
「論理力」と「思考力」の関係はどのようなものか、話し合ってみよう。略。（指導書参照）

語句

次の漢字を使った熟語を調べてみよう。

貫・慣 貫行、貫徹、貫通など 慣行、慣例、慣用など

漢字

一貫 14 10 厳格 15 12 詳しい 16 10 捉える 16 11 把握 16 14